

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19592579

研究課題名（和文） 精神障害者の社会参加効力感尺度簡易版の開発と日米間比較

研究課題名（英文）

Development of an Instrument (simple version) to Measure Self-Efficacy for Social Participation of Individuals with Psychiatric Disabilities in Japan and the U.S

研究代表者

天谷真奈美（AMAGAI MANAMI）

国立国際医療センター（研究所）医療情報解析研究部・研究員

研究者番号：00279621

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、精神障害者の社会参加への自信の度合いを測定する精神障害者社会参加自己効力感尺度オリジナル版 27 項目（以下、SESP27 と略す。）を短縮し、病状の重い精神障害者にも広く適用できる「精神障害者の社会参加自己効力感尺度簡易版（10 項目）（以下、SESP10 と略す。）」を開発することである。SESP10 は、確認的因子分析の結果から【社会的自己への信頼】2 項目、【セルフマネジメント】3 項目、【社会適応力】2 項目、【相互支援】3 項目の 4 つの下位尺度からなる因子構造を保ち、優れた信頼性、妥当性を示した。

研究成果の概要（英文）：It was developed the simple 10-item instrument to measure self-efficacy for social participation (SESP) for shortening of the original 27-item SESP of individuals with psychiatric disabilities. Internal consistency of the total SESP-10 was excellent ( $\alpha = 0.905$ ). Factor analysis yielded 4 interpretable factors: *Trust for Social Self*, *Self Management*, *Social Adaptability*, and *Mutual Support*. The scale demonstrated adequate criterion and construct validity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
20 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
21 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	960,000	4,420,000

研究代表者の専門分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：精神障害者・社会参加・自己効力感・国際比較・尺度開発

1. 研究開始当初の背景

（1）精神障害者支援においては、病気の

完治を目指すというよりも、慢性疾患ゆえに症状・障害を持ちながらもいかにその人らしく社会と関われる（社会参加できる）かという視点が重要である。

精神障害者の社会参加を阻む要因としては、社会的サポートや社会的受け皿の不十分さはもとより、精神障害者個人の要因も無視できない。社会参加を阻む精神障害者個人の要因として、単に機能障害や能力障害だけでなく、社会参加や地域生活に対する自己効力感（自信）の欠如が注目されている。

(2) そこで我々は、平成16年度～18年度の科学研究費補助金基盤研究（C）にてSESP27からなる、精神障害者の社会参加に対する自己効力感（自信）の強さを測定する尺度を開発した。この尺度は、精神科リハビリテーションの効果判定等を、精神障害者の主観的側面から測定できるという点で意義がある。

(3) だが近年、包括的地域生活支援（Assertive Community Treatment: ACT）等の医療・福祉・就労を含めた包括的なサービスを24時間体制で提供することにより、重度の精神障害を持つ者であっても、地域生活を営むことが可能となった。

そこで、精神障害者の社会参加自己効力感の強さを測るには信頼性、妥当性を備えた上で、項目数の少ない尺度が開発されればより使いやすく、様々な病状水準の対象者に広く活用できることは言うまでもない。

## 2. 研究の目的

精神障害者社会参加自己効力感尺度オリジナル版27項目を短縮し、「精神障害者の社会参加自己効力尺度簡易版(10項目)」を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査実施期間

2009年5月～12月

### (2) 調査対象

地域生活を送りながら、精神科医療機関デイホスピタル、活動支援センター、精神障害者小規模作業所、就労継続支援等を利用している精神障害者164名を対象に実施した。

### (3) 調査質問紙の内容

#### ①精神障害者社会参加自己効力感尺度 (SESP27)

本調査において、精神障害者社会参加自己効力感の強さを測るために、研究者らが開発し信頼性、妥当性を検証したSESP27オリジナル

版を用いた。この尺度は【社会的自己への信頼（計8項目）】【セルフマネジメント（計7項目）】【社会適応力（計7項目）】【相互支援（計5項目）】の4下位尺度（27項目）で構成されている。これらの項目に対し、「今のあなたの気持ちにあてはまるか」を4段階評定法（3：自信がある～0：自信がない）によって調査した。すなわち、得点が高いほど社会参加に自信があることを意味している。

#### ②社会参加に関連する尺度

RosenbergのSelf-Esteem尺度（Rosenberg、1965）、NorbeckのSocial Support尺度日本語版（前田ら、2003）、Sense of coherence尺度日本語版13項目（戸ヶ里、山崎ら、2005）、GHQ12（新納ら、2001）を使用した。他尺度の利用にあたっては使用許可を確認し、許可を得た。

その他、生活満足度と生活における目標の有無を問う質問を加えた。

#### ③個人の基礎的情報

具体的な項目として、性別・年齢・人種・宗教・診断名・入院歴の有無・罹病期間・居住状況・活用中の社会心理サービス・就労の有無等である。

#### (4) 精神症状の評価

個人属性の一部として精神症状の評価を行った。精神症状の評価は、対象者の負担を考慮し、できる限り少ない項目で測定できる簡易精神症状評価尺度（BPRS）を用いて評価した。評価はトレーニングを受けた精神看護専門家が行った。

#### (5) 質問紙完成および調査実施までの手続き

##### ①質問紙の構成に関する検討

精神医療に関して脱施設化の進んだ米国との比較を将来的に可能とするために、国民性、社会的背景、医療経済的バックグラウンド、地域精神医療看護福祉体制、社会心理サービスの現地を視察し、現状把握に努めた。日本と米国の精神障害者の社会参加自己効力感と関連因子の相違について米国の研究協力者と検討した。

##### ②質問紙の個人的基礎情報の作成

日米両国において一貫して利用可能となるように、アメリカ合衆国コロラド州をはじめアメリカ各州において広く使用されているColorado Client Assessment Record (CCAR) をベースに作成した。また社会心理的サービスを問う項目は、両国の医療保健福祉制度をつき合わせ、利用中の社会心理サービスおよび受給中の公的保障を中心に日本人対象者

に適するよう修正を加えた。

### ③調査票の翻訳およびバックトランスレーション

それぞれの言語で既存の調査票がある場合には、その原版を使用した。その際かならず著作権を確認し、著作権等不明の場合には、尺度の作成者に使用許可を得た。また既存の日本語あるいは英語の版がない場合には、日本語を母国語とし、米国在住 20 年以上の精神医療心理学研究者兼通訳者である米国在住研究協力者に英訳あるいは日本語訳を依頼した。バックトランスレーションは、本研究内容を知らない精神医療保健福祉分野の専門家で日本語を母国語とする英語の専門家に依頼し実施した。

### ④予備調査

調査は、まず日本で先行して行うこととした。予備調査を日本で地域生活をおくる精神障害者 2 名に実施し、必要となった微調整を行った。以上のように妥当性を確認し、質問紙の質的向上に努めた。

### ⑤調査協力施設の抽出と対象者への研究参加の呼びかけ

精神障害者はストレス脆弱性が健常者に比較し高い傾向にあることから、研究者と十分な関係がとれている研究協力施設職員を中心に研究の趣旨と倫理的配慮を説明し調査依頼した。

対象者への研究参加者呼びかけは、対象者と関係が築けている職員から紹介していただき、その際に強制ととられないように細心の注意を払った。研究の説明とともに倫理的配慮を説明し、同意の得られた場合には同意書への書面を求めた。

### ⑥研究の実施方法

質問紙については、自記式留め置き法を原則としたが、心身の状態により聞き取りを希望する対象者には、調査者が聞き取った。

また開発した精神障害者社会参加効力感尺度簡易版の信頼性を検証するため、1 回目の質問紙調査の後 1 ヶ月を目安に精神障害者社会参加効力感尺度のみ抜粋した質問紙を再度回答してもらった。

精神症状の評価は、1 回目の質問紙評価の直後に行った。精神看護の専門家が面接をし、評価した。評価の際には、プライバシーの保護と強制にならないよう細心の注意を払った。

### ⑦回収方法

質問紙に表紙をつけ、簡単に調査回答が他人にみられないようにした。調査実施後はひも付きの封筒に調査票を収めて一定の回収場所を設置した。回収した調査票は可能な限り迅速に、鍵付き保管庫に入れ保管した。

## 4. 倫理的配慮

本研究は京都大学京都大学大学院医学研

究科・医学部医の倫理委員会の承認を得た。

対象者の研究参加は自由であることや途中でも中断できることなど意思の尊重、匿名化や統計的処理によるプライバシーの保護、データを目的以外に使用しないこと、同意書への署名を持って同意とする内容を遵守した。

## 5. 分析方法

(1) 調査項目全体の回答分布の把握：単純集計と記述統計による実施。

(2) 精神障害者社会参加自己効力感尺度の短縮化の方法と信頼性、妥当性の検討方法

①まず 140 名の精神障害者社会参加効力感尺度の回答に関して、主因子法、バリマックス回転にて因子分析を行った。

②上記因子分析において因子負荷量が大きい項目を主として、SESP27 の因子構造を参考に、10 項目を選定し、精神障害者社会参加効力感尺度簡易版 (SESP10) とした。そして SESP10 の妥当性を検証するために、確認的因子分析を行った。

③短縮化した SESP10 の信頼性に関して内の一貫性  $\alpha$  係数、再テスト信頼性係数を算出した。

④短縮化した SESP10 の基準関連妥当性を確認するために、SESP10 の総得点と下位尺度得点と他の関連尺度得点との相関係数を算出した。

(3) 統計解析：SPSS for Windows 18.0 J (SPSS Inc., 2009) を使用した。

## 4. 研究の成果

### (1) 対象者の概要

配布数 164 名中有効回答数は 140 名 (85.4%) であった。その内訳を表 1 にした。8 施設間で性別、年齢、診断名、病状水準にばらつきの見られる項目もあったが、全体的にはほぼ同様の分布をしていることから、これらを一群として以下の分析を実施した。

表 1 施設別および全体の性別、年齢、診断名、BPRRS

施設	N	性別 (男性)	年齢	診断 N (%)			BPRRS
		N (%)	Mean (SD)	統合失調症	気分障害	その他	Mean (SD)
1	17	15 (88.2)	36.1 (9.7)	13 (86.7)	0 (0)	2 (13.3)	33.6 (11.3)
2	8	8 (100)	52.9 (7.9)	6 (75.0)	0 (0)	2 (25.0)	24.1 (2.8)
3	12	6 (50)	36.8 (6.6)	11 (91.7)	1 (8.3)	0 (0)	-
4	6	1 (20)	16.5 (16.1)	4 (100)	0 (0)	0 (0)	38.0 (9.7)

5	3	42.0 (66.7)	3	0	0	40.0 (5.6)	
6	21	11 (55.0)	48.4 (10.1)	13 (65.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	15.8 (8.2)
7	58	37 (67.3)	33.5 (8.5)	36 (62.1)	2 (3.4)	14 (24.1)	35.4 (11.6)
8	15	7 (46.7)	39.9 (10.5)	12 (72.6)	1 (6.7)	1 (6.7)	-
total	140	87 (64.4)	37.6 (11.9)	98 (72.6)	6 (4.4)	21 (15.6)	31.1 (12.9)

(2) SESP27 の因子分析結果からの項目選定と確認的因子分析

SESP27 の因子分析 (主因子法、バリマックス回転) の結果を表 2 に示す。因子は 5 つに分かれたが、【社会的自己への信頼】【セルフマネジメント】【社会適応力】【相互支援】の下位尺度の概念は、ほぼ保たれていた。

上記因子分析において因子負荷量が多い項目を主として、SESP27 の因子構造 (4 つの下位尺度) を参考に、10 項目を選定した (表 2 において ■ で示した部分)。これら 10 項目を精神障害者社会参加効力感尺度簡易版 (SESP10) とした。

SESP10 の妥当性を検証するため、確認的因子分析を行ったところ、4 つの下位尺度からなる因子構造は保たれており、SESP10 が十分な内容妥当性を持つことが示された (表 3)。

表 2 SESP27 の因子分析の結果

項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
何かするときに心配せずにできる	.764	.168	.235	.098	.329
過去の失敗を割り切ることができる	.627	.170	.161	.159	.248
疲れや緊張を感じながらも他者と付合える	.602	.407	.126	.310	.017
自分は社会の中で価値ある人間だと思える	.599	.186	.528	.300	.037
なにかあるいは誰かの役に立つことができる	.595	.238	.248	.412	.204
自分の判断で物事を決めることができる	.529	.420	.098	.351	.403
社会の変化に追いついていける	.470	.320	.342	.061	.467
体調をコントロールしながら生活を送っていける	.165	.736	.300	.252	.229
気分をコントロールしながら生活を送っていける	.378	.598	.299	.251	.130

自分なりの生活を送っていけるだけの体力がある	.192	.581	.253	.195	.385
自分でスケジュールを決めて生活できる	.264	.542	.344	.252	.177
困ったときに使える社会資源を知っている	.242	.509	.198	.227	.293
生きていく上で (人より) 苦勞が多いと感じたとしてもやっっていける	.380	.483	.170	.199	.308
自分は他者に言える社会的立場が持てる	.192	.288	.732	.133	.141
自分にあった仕事や活動を見つめることができる	.208	.192	.526	.189	.472
将来自分なりに納得した生活が送れる	.181	.432	.490	.348	.204
慣れた仕事や安心できる環境があり、やっっていけそう	.186	.278	.473	.079	.472
努力すれば自分にも社会を変えることができる	.260	.219	.430	.429	.177
自分が活動したり社会参加することは他者の励みになる	.261	.303	.409	.245	.317
自分を認めてくれる人がいる	.181	.058	.252	.677	.327
心配ごとや困りごとを相談できる	.135	.371	.061	.643	.062
自分が努力すれば、周囲の人と仲良く暮らせると思う	.295	.395	.242	.600	.144
他者に自分の回復を信じてもらえる	.331	.250	.418	.471	.175
安心して過ごせる場所を持つことができる	.336	.242	.053	.450	.523
必要な情報を自分で調べることができる	.199	.312	.176	.298	.479
何か自分がやりたいことについて、どうしたらできるか分かる	.321	.408	.324	.196	.461
自分の病気を隠さずとも社会に受け入れられる	.386	.217	.303	.261	.393

\*SESP10 を ■ で示す。

表 3 SESP10 の因子分析の結果

項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
I. 社会的自己への信頼				

将来自分なりに納得した生活を送れる	.330	.273	.773	.306
努力すれば自分にも社会を変えることができる	.241	.416	.466	.204
<b>Ⅱ．セルフマネジメント</b>				
体調をコントロールしながら生活を送っていける	.887	.251	.201	.234
気分をコントロールしながら生活を送っていける	.631	.294	.303	.230
自分なりの生活を送っていただけるだけの体力がある	.487	.299	.270	.359
<b>Ⅲ．社会適応力</b>				
必要な情報を自分で調べることができる	.187	.256	.173	.688
何か自分がやりたいことについて、どうしたらいいかわかる	.393	.203	.313	.538
<b>Ⅳ．相互支援</b>				
自分を認めてくれる人がいる	.135	.754	.150	.284
他者に自分の回復を信じてもらえる	.325	.584	.291	.214
心配ごとや困りごとを相談できる	.343	.538	.195	.115

### (3) SESP10 の信頼性の検討

内的一貫性  $\alpha$  係数、再テスト信頼性係数

SESP10 の内的一貫性を調べるために、SESP10 全体および下位尺度ごとの Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した (表 4)。

SESP10 全体および下位尺度全ての  $\alpha$  係数が 0.7 以上であり、十分な内的一貫性が示された。

また SESP10 の再テスト信頼性を検証するために、1 回目と 2 回目に行った SESP からそれぞれ SESP10 得点を算出し、1 回目と 2 回目の SESP10 得点の相関係数を算出した。

相関係数全てにおいて、1%有意水準で相関が確かめられ、十分な再テスト信頼性が示された。

表 4 SESP10 全体および下位尺度ごとの  $\alpha$  係数

	$\alpha$
SESP10 (total)	0.905
I．社会的自己への信頼	0.752
Ⅱ．セルフマネジメント	0.839
Ⅲ．社会適応力	0.700
Ⅳ．相互支援	0.786

表 5 SESP10 全体および下位尺度ごとの 1 回目と 2 回目の結果の相関係数

	R
SESP10 (total)	0.718**
I．社会的自己への信頼	0.617**
Ⅱ．セルフマネジメント	0.642**
Ⅲ．社会適応力	0.496**
Ⅳ．相互支援	0.724**

\*\*  $p < 0.01$

### (4) SESP10 の妥当性の検討

SESP10 の総得点と下位尺度得点と他尺度得点との相関係数

SESP10 の基準関連妥当性を検証するため、関連尺度との相関係数を算出した (表 6)。

下位尺度「セルフマネジメント」と Norbeck の Social Support 尺度以外は全て有意な相関が確認された。

表 6 SESP10 と関連尺度との相関係数

尺度	SESP10				
	t	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Rosenberg の Self-Esteem 尺度	.798**	.710**	.671**	.713**	.661**
Norbeck の Social Support 尺度	.207*	.294**	.014	.178*	.259**
Sense of coherence	.510**	.400**	.415**	.505**	.455**
GHQ12	.437**	.314**	.357**	.469**	.374**
生活満足度	.522**	.435**	.456**	.449**	.449**
目標の有無	.334**	.306**	.248**	.303**	.293**

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$

### (5) まとめ・考察・結論

本研究では、精神障害者の社会参加への自信の度合いを測定する精神障害者社会参加自己効力感尺度オリジナル版 27 項目を短縮し、病状の重い精神障害者にも広く適用できる「精神障害者の社会参加自己効力感尺度簡易版(10 項目) (SESP10)」を開発した。

SESP10 は、確認的因子分析の結果から【社会的自己への信頼】(2 項目)、【セルフマネジメント】(3 項目)、【社会適応力】(2 項目)、【相互支援】(3 項目) の 4 つの下位尺度からなる因子構造を保っており、十分な内容妥当性があることが示された。また優れた内的一貫性と再テスト信頼性、基準関連妥当性が示された。

地域精神保健サービスが整備され、より重度の精神障害をもつ者が地域で暮らすこと

が可能になった現在、より簡便に使用できる  
SESP10の有用性は高い。今後、地域精神保健  
サービスの効果判定や、当事者のもつ能力の  
査定など、SESP10のさらなる活用方法につい  
ての検討が必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文] (計1件)

- 1) 天谷真奈美, 鈴木麻揚, 柴田文江, 阿部由香, 田中留伊, 大迫哲也, 板山稔. 統合失調症者の社会参加自己効力感を促進する要因. 国立看護大学校紀要(査読有), 7(1):1-8, 2008

[学会発表] (計4件)

- 1) Suzuki Mayo, Shibata Fumie, Amagai Manami, Sakuraba Shigeru. Development of a measure for self-efficacy for social participation of persons with mental disabilities (provisional version), and verification of its content validity. 13th Annual Qualitative Health Research Conference (The 13th Annual Qualitative Health Research Conference: 285), 2007. 6. 20-23, Korea
- 2) Amagai Manami, Suzuki Mayo, Shibata Fumie, Abe Yuka, Kobayashi Noriko, Sekine Tadashi, Campbell Kampbell, Kayaba Kazunori. Standardization of the self-efficacy for social participation for people with psychiatric disabilities (SESP-27). 10th International Congress of Behavioral Medicine (Abstract Book: 236), 2008. 8, Tokyo
- 3) Suzuki Mayo, Amagai Manami, Shibata Fumie, Sekine Tadashi, Kobayashi Noriko, Abe Yuka, Campbell Kampbell, Sakuraba Shigeru. Comparison of self-efficacy for social participation between competitively and non-competitively employed consumers with psychiatric disabilities. 10th International Congress of Behavioral Medicine (Abstract Book: 244). 2008. 8, Tokyo
- 4) Amagai Manami, Suzuki Mayo, Itayama Minoru, Shibata Fumie. The social participatory processes of schizophrenic people and their influencing factors. The Joint Scientific Meeting of IEA Western Pacific Region and Japan Epidemiological Association (journal

of epidemiology (suppl.), 20: s324).

2010. 1, Saitama

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計◇件)

[その他]

ホームページ等なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

天谷真奈美 (Amagai Manami)

国立国際医療センター(研究所)・医療情報  
解析研究部・研究員

研究者番号: 00279621

##### (2) 研究分担者

鈴木麻揚 (Suzuki Mayo)

西武文理大学・講師

研究者番号: 60336493

##### (3) 連携研究者

阿部由香 (Abe Yuka)

国立国際医療センター(研究所)・医療情報  
解析研究部・研究員

研究者番号: 00320713